

## 城下町を出て

辻 憲男（文学部教授）

出石（いずし）の歴史は古く、古事記や播磨国風土記に、朝鮮の王子アミノヒボコが来住したと伝える。ふしぎな話だが、赤玉から生まれた妃アカルヒメが本国の日本へ帰ったので、そのあとを追って渡来したのだという。室町期は守護大名山名氏が城を築き、18世紀以降は仙石氏の城下町となった。

昭和期の評論家・小林秀雄は、若いころ小説家志望だった。志賀直哉に私淑し、京都山科や奈良の家を訪ねたこともある。最初の小説「一つの脳髓」は旧制高校在学中に書いた。「三年前父が死んで間もなく、母が咯血した」「私はその当時のことを書きたいと思った。しかし書き出してみると自分が物事をはっきりと視ていないことに驚いた」「自分だけで呑み込んでいる切れ切れの夢のような断片が出来上がると破り捨てた」。小林の父は出石の出身で、教員から進取独立の技術家になった。東京人の小林は父の故郷には関心を示さなかった。

出郷の先覚者のなかで特筆すべき一人は、教育家・巖本善治（いわもとよしはる）であろう。東京で農学を学び、キリスト教主義の明治女学校の創設に参加した。教師に北村透谷、島崎藤村、津田梅子らを招き、女性啓蒙誌『女学雑誌』を主宰発行した。所載の透谷の名論文「厭世詩家と女性」は、「恋愛は人世の秘鑰（ひやく）なり、恋愛ありてのち人世あり、恋愛をぬき去りたらむには人生何の色味かあらむ」と始まる。秘鑰は秘密を解く鍵。1892年当時において、これは女性史のみならず、文学思想界の新生を告げる衝撃的な人間宣言であった。



豊岡市出石町の辰鼓楼。1日3回、太鼓音の時報が流れる。  
小説家野上弥生子は明治女学校に学んだ。